

私の考える「和」とは

世界中が画一化される世の中で今、日本人が思う「和」と外国の方が感じる「和」は別のものになっているのではないだろうか。
日本人にとっての和は木造建築や抹茶などの目にみえる伝統的なものが多いと思われる。一方で現在、世界から見た和はアニメや治安の良さ、衛生面、真面目な国民性である。

私は、現代における「和」とは人々の生きたさまが映し出されたものだと考える。階段は上りと下りを左右で分ける、文字はとめ・はね・はらいをしっかりする。そういったきちんとした真面目な国であることが私たちの誇りであり和である。

変化、あるいは進化し続ける私たちの暮らしの中で「和」も進化し続けるものであって欲しい。そしてふとした瞬間に自分の生まれ育った土地や文化の素晴らしさを実感する、私の考える「和」とはそういった日常に溶け込んだものである。

モチーフ・渋谷スクランブル交差点



海外留学から帰ってきて日本の空港に降りたった瞬間、「静かだな」と思った。日本は静かで落ち着いている。
首都・東京のスクランブル交差点でさえ同じことが言える。あれだけ大勢の人が四方から歩いているのにも関わらず、ぶつかることもなくクラクションや怒声が響くわけでもない。その静かな調和こそが和の心だ。

<スクランブル交差点の歴史>

江戸時代

東海道に通じる大山街道と呼ばれる大きな道が伸びていた。当時から大量の人と物が行き交ういわば“交通の要衝”だった。

明治時代

渋谷駅の前身となる「鉄道渋谷駅」が作られる。
「富国強兵」により日本軍の施設が設置されていき兵士が暮らす街へと変貌を遂げた。それに伴い娯楽用の施設が増えて少しずつ華やかな街になる。

太平洋戦争

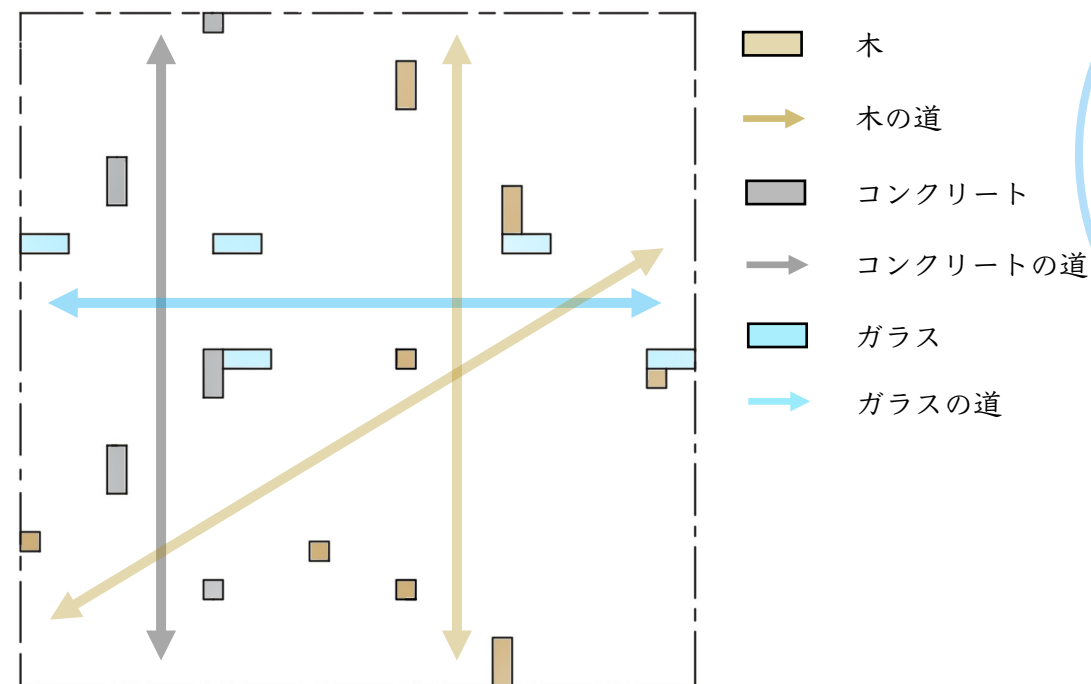
大空襲により焼け野原となる。
戦後、GHQの指導によってスクランブル交差点の整備が進められた。

1973年

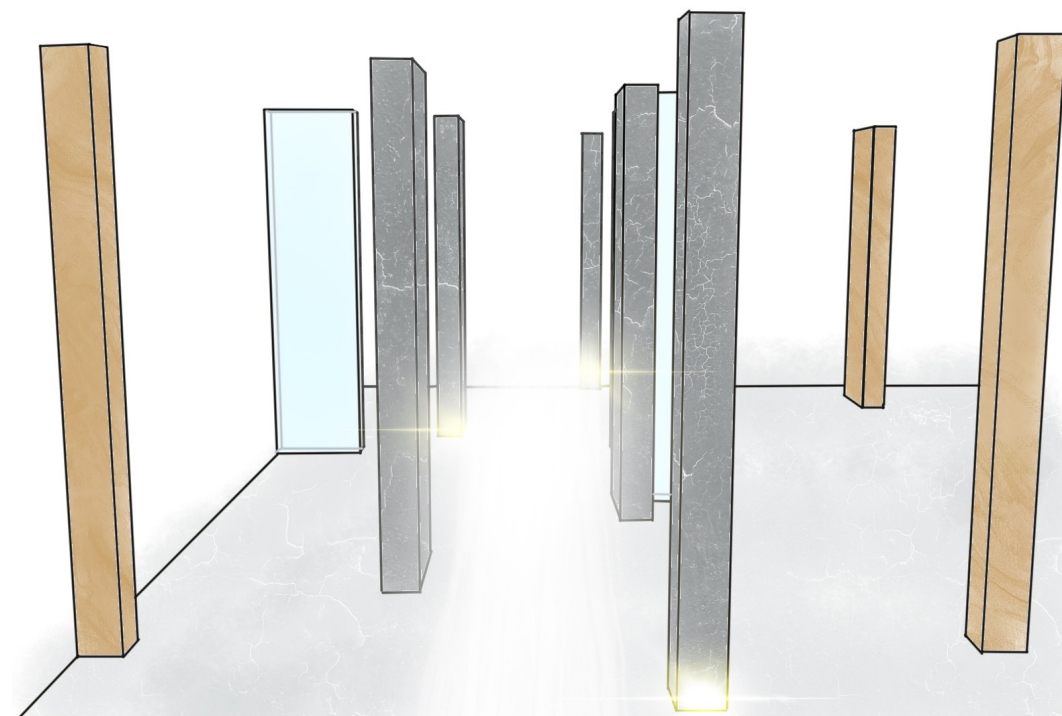
交差点のスクランブル化により人が波のように押し寄せる光景が生まれる。

観光地へ

スクランブル交差点はあくまで「通過場所」であったが2000年以降、人々がぶつからず静かに行き交う様子やハロウィン、年越しなどのイベントが話題になり国内外ともに行きたいと思う「目的地」になった。



動線図



3つの異なる素材で一見、無秩序に思われる空間に一筋の光が差し込むことで同じ素材の組み合わせが浮かび上がる。
そこを歩かないといけないうルールはなくとも無意識に光の軌跡を辿ってしまう。その感覚こそが日本人の真面目な国民性を表すものであり、それを表現している。これは視覚的にはわからないが感覚的に和を感じる、体験型の空間である。